様式１２(人課博)

論文審査の要旨

1. 本研究の概要

新版Ｋ式発達検査は、日本国内で児童相談所をはじめとするさまざまな児童福祉機関や教育機関において子どもの発達の様子を評価する検査として広く利用されている。この発達検査の改訂に向けた精密化の作業の一環として、主として乳幼児期から児童期にかけての子どもの発達過程を心理学的に分析し評価することが本論文の主要な目的である。すでに発達検査の項目として組み込まれた課題の有用性を検討するとともに、新たな検査課題を導入することの諸問題を検討した。具体的には、子どもの精神機能の諸側面が反映される検査課題として、「語の定義」、「名詞列挙」、「ふり遊び」、「じゃんけん」、「絵並べ」という５種類の課題に着目し、これらの課題の特徴や子どもの反応特性を分析した。本論文は全体として三部立てになっており、七つの章から構成され、上記の５種類のそれぞれに焦点をあてた五つの実証的検討が含まれている。これら五つの実証的検討のうち、最初の二つ（「語の定義」と「名詞列挙」）は、既存の検査項目の内容について検討したものであり、3～6 歳児 351 名と小学 1～6 年生 578 名をそれぞれ対象として利用可能性を調べた。残りの三つ（「ふり遊び」と「じゃんけん」と「絵並べ」については、新しい検査項目の開発という視点から精密な発達評価をめざし、1 歳 6 か月児健診の受診児を含む 0～3 歳児 201 名、1～7 歳児 511 名、3～8 歳児 349 名をそれぞれ対象とした。これらの結果を総合して、現行の新版Ｋ式発達検査 2001 は認知適応領域と言語社会領域との間で評価の精密度に差異があること、既存の検査項目の改良と新たな検査項目の導入によってそれらが修正可能であることなどを明らかにした。さらに、こうした研究結果に基づいて、検査課題が相互に補完的な役割を果たす新たな発達評価モデルの提案を試みた。

2. 本論文の特色と評価

本論文の著者は、新版Ｋ式発達検査を出版している社会福祉法人・京都国際社会福祉協力会京都国際社会福祉センターの発達研究所の研究員である。この発達検査は、1983 年の発行以来、子どもの発達評価に関して全国の福祉・教育・医療の現場で標準的に用いられており、2020 年の改訂版の発行をめざして著者が中心的な役割を果たしている。本研究は、これまで十数年の歳月を要し、合わせて約二千名の子どもの協力により、統制された諸条件の下で個別的に得られた貴重な発達評価データを整理・分析したものである。主要な研究成果として、子どもは発達の諸側面において乳幼児期から段階的にさまざまな検査課題を通過して学童期に至るが、そうした発達プロセスを測定・評価するための検査課題の構成に関する問題が指摘され、個々の検査課題の関係や系列性を詳細に把握することで、より精密な発達評価が可能になることが強調された。ここで新たに提案された発達評価モデルは、さまざまな障害や困難を含め、子どもの発達の諸相を正確に知るうえで、きわめて重要な示唆を含んでいる。

3. 判定

博士論文の提出要件については、すでに予備審査の段階で充足していることが確認されている（査読機関のある学会誌 2 編など）。本論文は、新版Ｋ式発達検査の改訂作業に関連して、子どもの発達水準の測定に関する基礎研究として従来の研究結果の再検討を迫る貴重な研究成果が示されているものであり、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。